

『浄土論註』における五念門の考察

大谷派 塚 寄 拓 也

はじめに

曇鸞の『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『論註』）が、世親の『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下『論』）を註解したものであることは言うまでもない。『論』の論旨は、解義分冒頭の「願偈大意」章に、

此願偈明何義、示現觀彼安樂世界、見阿弥陀如来願生彼国故。（『真聖全』一・三二二）

とあるように、浄土を觀ずることを通して阿弥陀如来を見、そのことで生じた願生心を示現するという、いわゆる「觀・見・願生」である。そして続く第二起觀生信章ではその行として、

云何觀云何生信心。若善男子・善女人、修五念門行成就、畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。（『同』）

と五念門が示され、これが成就すれば浄土に生まれ阿弥陀仏を見ることを得るのだとしている。五念門は身業による札拜門、口業の讚歎門、意業の作願門、智業の觀察門、方便智業たる回向門からなる。曇鸞はこの解義分の五念門を偈頌に配当し、また作願に三義、觀察に二義、回向に二相を開くなど、独特な解釈を施した。

この五念門についての見解だが、偈頌及び解義分の大部分を觀察門が占め、また冒頭で述べたように『論』の主旨

が「観・見・願生」なので、観察門を正定の業と捉えるものもある。⁽¹⁾ また近年では、曇鸞の十念往生の法門と世親が示した五念門とは異なるものとする見解もある。⁽²⁾ これはおそらく讚歎・作願・観察の三門の内容にある、如実修行という、およそ普通の人間では修すことが不可能と思われる行に起因するのだろう。「下巻」菩薩莊嚴釈には、

真如是諸法正体。体如而行則是不行。不行而行名如実修行。(『同』三三四)

と、如実修行は行ぜずして行ずという作心の無い行であることが示されている。さらに菩薩莊嚴最後の持嚴三宝功德⁽³⁾には、

四者彼於十方一切世界無三宝処住持莊嚴仏・法・僧宝功德大海遍示令解如実修行。(『同』三三六)

と、『論』本文に無仏の国に生まれて遍く如実修行を解らせるのだとあり、おおよそ易行道であるとは考えられない。⁽⁴⁾

一方、真宗では古くから⁽⁴⁾一心帰命である信が自然に身口意の三業二利として現れる起行とされ、また五念門の「念」は「念仏」あるいは「憶念」であるとされる。このことについては、山本仏骨の「曇鸞の五念門釈に就て」(『宗学院論輯』第三五輯)で詳細にまとめられている。その要旨は、

①八番問答、覈求其本釈において往生の行は十念念仏に収束されており、よって五念門とは称名するところに五つの相が並存することを示すものと解すべき。

②八番問答第七における「念」についての問答を見ると、

問曰。幾時名為一念。答曰。百一生滅名一刹那、六十刹那名為一念。此中云念者、不取此時節也。但言憶念阿

弥陀仏若総相若別相、隨所觀縁心無他想念十念相続名為十念。但称名号亦復如是。(『同』三一〇)

とあるから憶念とすべき。これを、観想念仏のみに集約する見解もあるがそれでは、

但積念相続不縁他事便罷。(『同』三一一)

という第八問答の文が不要となる。また、起観生信章を見ると各門すべてに願生心、もしくは憶念の三業が行相として現れている。

③五念門はすでに如来によって行の功德が名号として成就しており、その徳が聞名により行者の信心となり、それが行者自身の行相として自ずと身口意の三業に現れ出るといふものである。

この山本の見解は的確なもので基本的に異論はない。⁽⁵⁾けれどもこの見解も含めて、これまでの研究では今ひとつ明瞭になっていないと感じる点がある。それは、

(1) 礼拝・讚歎・作願の上三門を成じて、観察・回向の下二門を起こすという、成上起下偈に関して。

(2) 下三門ではそれぞれ此土、彼土について分けられるが、このことについてあまり考察がなされていない。

(3) 各門の關係について。
という三点である。

以下の節でこれらのことについて推求していきたいが、(2)において今回の紙数では回向門に関して十分な考察を施すのは難しいと考え触れない。他日を期したい。

一

『願生偈』第二行について曇鸞は、

我依修多羅真実功德相説願偈総持与仏教相応(中略)成上三門起下二門。(『同』二八四)

と、上三門を成じ下二門を起こすもののだと言ひ、五念門の成立根拠と定めている。当節ではこの成上起下偈とされ

る第二行について見ていくことで、曇鸞が五念門をいかなる行として捉えていたかを考察したい。

まず、

第一行四句相含有三念門、上三句是礼拝・讚嘆門、下一句是作願門。(『同』二八一)

とあり、礼拝・讚歎・作願の上三門が一体であることを第一行に關して述べている。そして曇鸞は「何所依、何故依、云何依。」と第二行の「依」を問題にし、

何所依者、依修多羅。何故依者、以如来即真实功德相故。云何依者、修五念門相応故成上起下竟。(『同』二八四)と、三方面から確める。

まず、依り処となる修多羅についてだが、この箇所先立って曇鸞は、

「無量寿」者、言無量寿如来寿命長遠不可思量也。經者常也、言安樂国土仏及菩薩清淨莊嚴功德・国土清淨莊嚴功德、能与衆生作大饒益、可常行于世故名曰經。(『同』二八〇)

と、無量寿如来の三種莊嚴は常にこの世界において行ぜられ、衆生のために大饒益を為すものであるとし、その故に經と名づけられるのだ定義している。つまり我々の思い以前に如来の行が先だって行ぜられていることが示される。三種莊嚴すべてに「成就」の文字がつけられているのは、このことを示すのであろう。また經について、

「無量寿」是安樂淨土如来別号。釈迦牟尼仏在王舎城及舎衛國於大衆之中説無量寿仏莊嚴功德。即以仏名号为經鉢。後聖者婆藪槃頭菩薩服膺如来大悲之教、傍經作願生偈。(『同』二七九)

と、如来の別号がその体、すなわち常に衆生のために大饒益を為すところの無量寿仏の莊嚴の体は、弥陀の名号だと断じている。

そうなると修多羅に依るといふことは浄土、さらにはその体である名号に帰することに他ならない。また、『論註』では帰敬序にある「世尊」を釈して、

此言意婦釈迦來。何以得知下句言「我依修多羅」。天親菩薩、在釈迦如来像法之中、順釈迦如来經教、所以願生。願生有宗、故知此言婦於釈迦。若謂此意、遍告諸仏亦復無嫌。〔同〕二八一〕と述べ、釈尊あるいは諸仏に帰すということも示している。そして、

此中言「依修多羅」者、是三藏外大乘修多羅、非阿含等經也。〔同〕二八四〕

と『浄土三部經』は自利利他成就を課題とする大乘の經典であることを強調する。

以上のようなことから、修多羅に依るとは弥陀の名号・浄土に帰すことであると同時に釈尊を始め三世十方の諸仏に信順するものでもあり、さらには大乘の課題である自利利他に答えるものであるということを示すものだと考えられる。

次に依る理由として、如来は眞実功德の相である故とする。眞実功德相について曇鸞は、

「眞実功德相」者、有二種功德。一者従有漏心生不順法性。所謂凡夫人天諸善、人天果報、若因若果、皆是顛倒皆是虚偽、是故名不実功德。二者従菩薩智慧清浄業起莊嚴仏事。依法性入清浄相。是法不顛倒不虚偽、名為眞実功德。云何不顛倒、依法性順二諦故。云何不虚偽、撰衆生入畢竟浄故。〔同〕二八四〕

と、眞実功德の相を不実功德と眞実功德の二義に開いて註釈している。不実功德では人天の因果はすべて虚偽であり顛倒であるとする。そして眞実功德とは法性に依り真俗二諦に順じるから顛倒ではなく、そして虚偽・顛倒で眞実なる要素が皆無であるところの衆生を撰して、法性の浄らからさとりに入らしむるから虚偽でないとするのである。不実のないところには、また眞実もない。虚偽顛倒なる人天の果報を無限に転じるのが、眞実功德の相とするのである。

これを承けて下二門が起されるが、偈頌では觀察門に入ると清浄功德で「觀彼世界相 勝過三界道」となり、以下二十九種莊嚴としてその具体相が展開される。順に見ていくと「上卷」の国土莊嚴が終わったところでは、「是

故願生彼 阿弥陀仏国」と、作願門の「願生安樂国」という語を承けて改めて願生の意が表明されている。京都・常楽寺本(存覚写本)の『浄土論』や、長圓寺本の『論註』では「故我」とあり、親鸞加點本及び複数の本では「是故」となり、主語である「我」を省いているが、とくに問題はないだろう。曇鸞が「上巻」の三種莊嚴功德成就の釈のすべてに「故」あるいは「所以」の文字を用いるのはこれを承けたものと推測される。『論註』上巻では多少の表現の違いがあるものの、二十九種莊嚴すべてにはほぼ共通したパターンがある。まず、「仏、本、何が故ぞ此の莊嚴を起こしたまう」と阿弥陀仏が因位の法蔵比丘であつた時にどうしてこの莊嚴を起したのか問う。続いて「有る国土を見そなわずに」と、娑婆世界を法蔵が智慧をもつて觀察してみると、衆生の姿は虚偽の相、顛倒の相を呈している。だから、「是の故に大悲心を興したまう」と願心を起したのだという形である。衆生の現実相が法蔵をして願心を發起せしめたというのである。そして、「是の故に(偈頌の句)と言えり」という言葉で締められることが多い。我々はこの莊嚴された浄土を通して、「衆生を摂して畢竟浄に入らしむる故に」という虚偽ではない眞実功德相たる如来と出遇うのである。

また、このことは下巻末の利行満足章の五功德門最後の出第五門に『論』の文で、

出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示應化身回入生死園煩惱林中、遊戲神通至教化地、以本願力回向故、是名出第五門。(『同』三四五)

と端的に述べられる。觀察が入だけでなく出の門にもあることが注目される。またこの行の主体を善男子・善女人とするか法蔵菩薩とするか見解が分かれるが、これらは後で述べたい。

この文より依る理由として如来が「眞実功德相の故に」というのは、「本願力回向を以ての故に」ということになるであろう。「下巻」の不虚住持功德釈では、

「不虚住持功德成就」者、蓋は阿弥陀如来本願力也。(中略)所言不虚住持者、依本法蔵菩薩四十八願、

今日阿弥陀如来自在神力。願以成力以就願。願不徒然、力不虛設、力願相符畢竟不差故曰成就。(『同』三三二)

とあって、法藏菩薩の四十八願があつたから仏力が生じたのであり、また仏力が生じたから願が本物であつたのだとしてゐる。平野修は、

「願」がなければ仏教と言いましてもわれわれの欲望を満足させることにしかならず、また「願」だけであるなら単なる教理とか仏教の神話ということにしかありません。そういう危険性がある中で、「力願相符って」成就したというところに、仏教の基礎があるということを示明らかにされたわけです。(『平野修選集』三・一一〇)

と述べてゐる。つまり、願より仏力が生じたということは本願が現実になつたということであり、その現実がまた願を証すのである。以上のようなことから「故」という文字に着目すると、「如来は即ち眞実功德の相なるを以ての故に」とあるのは、本願力回向の現実相であるということを示しているものと考ええる。

三つ目はどのように依るのかという方法を問い、五念門を修して相応するが故にとある。下巻の起観生信章を見てもみよう。曇鸞は、

起観生信者、此分中又有二重。一者示五念力、二者出五念門。(『同』三三二)

と、『論』では五念門とあるだけなのにそれを二つに分けて五念力と五念門とし、前者については「示す」、後者については「出す」と区別している。五念力については、

云何観云何生信心。若善男子・善女人、修五念門行成就、畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。(『同』)

という『論』の文を出し、行を成就すると浄土に生まれて阿弥陀仏を見るところが得られるという五念門の力用の側に着目している。一方、五念門の方は『論』の文を引いて各門の名称を出してから、

「門」者入出義也、如人得門則入出無導。前四念是入安樂淨土門、後一念是出慈悲教化門。（『同』三一二）と、「門」には入出、すなわち自利利他という意味があるとし、前の四念が入の門、最後の回向門が出の門で、もし門を得れば人間は入出自在であると論じている。ここで、曇鸞が五念門については「出す」としたのは、慈悲教化の門である回向門より出た行であることを示そうとしたのではないだろうか。回向門については『論』の文に、

云何回向、不捨一切苦惱衆生、心常作願、回向為首得成就大悲心故。（『同』三一六）

と、「回向を首（はじめ）と為して」とある。五念門を一個人で完成させる行と捉えるのであれば、これは奇異なことになるであろう。けれども己に先立つ得道の者がいないというのであれば、行によって自利利他成就するということは単なる予想や希望というものになってしまふであろう。また、先に見た出第五門の観察と同様、入の門以外に出の門である回向門にも作願がある。上巻の回向門釈では、

我作論說偈願見弥陀仏、普共諸衆生往生安樂國。（一字下げは『論』の文、以下同様。）

此四句是論主回向門。回向者回己功德、普施衆生共見阿弥陀如来生安樂國。（『同』三〇七）とあるように、五念門は個人の行ではなく、諸衆生と「共に」作願する行なのである。

しかし、第九願事成就章を見てみると、

如是菩薩智慧心・方便心・無障心・勝真心能生清淨仏国土、応知。

「応知」者、謂応知此四種清淨功德能得生彼清淨仏国土非是他縁而生也。

是名菩薩摩訶薩隨順五種法門所作隨意自在成就。如向所說身業・口業・意業・智業・方便智業、隨順法門故。「隨意自在」者、言此五種功德力能生清淨仏土出沒自在也。身業者礼拝也、口業者讚嘆也、意業者作願也、智業者觀察也、方便智業者回向也。言此五種業和合、則是隨順往生淨土法門自在業成就。（『同』三四三）

とある。『論』では菩薩は智慧・方便・無障・勝真の四心によって清淨仏国土に生まれるのであり、これが先に説い

た五念門の法門に随順して所作が自在であるのだとされ、起観生信章の「云何観云何生信心」という問いに対する答となっている。曇鸞はこれにコメントを加え、五念門による五種の功德力により浄土に出没自在となり、五業が和合したならば往生浄土の法門に随順したことになり、出没自在の業が成就するのだとする。これだけを見ると、善男子・善女人が自らの力で五念門行を完成させ菩薩になるかのようにも見える。けれども先に見た眞実功德積にあるように、人天の所行はすべて虚偽・顛倒に他ならない。願事成就章で終わらずに、続いて利行満足章があるのは、ここでそのことを再度確かめる意図があったのではないだろうか。この章はまず、『論』の言葉で、

復有五種門漸次成就五種功德、応知。(『同』三四四)

と始まる。「復」という字が五念門の他に五門があることを示し、これが五念門を成就するというのである。先に引いた本願力回向の文と合わせて考えると、五念門の果である五功德が回向されることによって五念門を成就する(7)という従果回向ということが予想される。第五善巧撰化章の『論』の文を見ると、

何者菩薩巧方便回向。菩薩巧方便回向者、謂説礼拝等五種修行、所集一切功德善根、不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、作願撰取一切衆生共同生彼安樂仏国。是名菩薩巧方便回向成就。(『同』三三九)

とあり菩薩は五念門を修して成就した功德、すなわち利行満足章に出てくる五功德門を衆生の上そのまま回施し、共に浄土に生まれたいと作願するとある。つまり、我々に先立つて五念門の行は成就されており、その功德が回向されることによって、また五念門が成就するというのである。

ところで、先に行の主体を善男子・善女人とするか法蔵菩薩にするかということについて少し触れたが、文の当面においては凡夫である前者のようである。けれど、巻末の覈求其本釈では、

問曰。有何因縁言「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」。答曰。『論』言。修五門行以自利他成就故。(『同』三四六)
と、願生行者が菩薩として速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得るのはなぜかと問い、それに対して一

応は五門の行を修して自利利他成就したからである「故」としつつ、

然覈求其本阿弥陀如来増上縁。他利之与利他談有左右。若自仏而言宜言利他、自衆生而言宜言他利。今將談仏力、是故以利他言之。當知此意也。凡是生彼浄土及彼菩薩人天所起諸行皆縁阿弥陀如来本願力故。何以言之、若非仏力四十八願便是徒設。(『同』三四七)

と、実はその大本は阿弥陀如来の本願力に依るが「故」であるとして、もし仏力でないのなら四十八願などまったく意味のないものではないかと断言する。そして、続いていわゆる三願的証に入り、丁寧到他力ということを証明している。つまり、五念門は現象としては凡夫である善男子・善女人の上に三業二利として現れ出るが、その根源は本願力回向によるものであるということになる。

ちなみに、ここで自ずから仏から言えば、他なる衆生を利する(利他)と言い、衆生の側から言えば自ずから、他なる衆生が利せられるのだとする。だから、利他と言う場合には、仏力を指すのだという他利利他の深義が出される。他利の他を他力とする説もあるが、出第五門釈で見られる曇鸞の本願力理解は、

譬如阿修羅琴雖無鼓者而音曲自然。(『同』三四五)

とあつて音曲自然とある。つまり衆生から見ると、度す者無くして度されるということになるから、ここ「若自佛而言宜言利他自衆生而言宜言他利」という「自ずから……利する(利せられる)」の文で十分、他力の意が尽くされていると思う。ゆえに、この他は衆生とすべきである。

話を戻すが、起観生信章において五念門に先だつて五念力が出されたのは、他力を意味するのであろう。五念力の方は「示す」、五念門の方は「出す」とあり、五念門は五念力から出ることが表されている。

以上のようなことから、修多羅の真実功德相に相応する『論』で説かれる五念門行は、普遍的なもので個人の方に属さない行であり、因が果となり、またその果が因となる因果一如の行であると言うことができるのではないか。

それで回向成就の相である真実功德相に依つて相応するとあるのだから、讚歎門以下の三門や菩薩莊嚴功德成就に見られる如実修行という言葉は、悟るためにこれから修行するのではなく、悟りそのものを行じることとなる。「五念門を修して相応するが故に」とは、回向された五功德を用いるということになるだろう。もつと言えば、「本願力回向を以ての故に」ということになるであらう。

二

当節では、曇鸞がどのようにして作願に三義、観察に二義を開いたかということを中心に論じたい。曇鸞がこのような註釈を行ったのは、現時点では五念門積と五功德門積を照らし合わせて見ることで、このような註釈を行ったとの感を持つている。前節で述べたが、曇鸞は五念門を回向された功德を用いて行ずるものと捉えていたと考えるからだ。少々煩瑣になるが従果向因の観点から、五功德門積から五念門積を見るところを試みたい。また、前後の繋がりも見ておきたいので、入第一、二門にも触れておきたい。

入第一門は『論』に、

以礼拝阿弥陀仏爲生彼国故得生安樂世界是名入第一門。(『同』三四四)

とあり、それに対して『論註』では、

礼仏願生仏国是初功德相。(『同』)

と釈す。つまり、仏を礼拝して仏国に生まれと願する心が生じたことがこの功德の相である。つまりこの功德が回向されて、凡夫の身に成就するのである。そのことを念頭にして、因の礼拝門の方を見てみよう。

『論』の文を抽出すると、

云何礼拝、身業礼拝阿弥陀如来应正遍知。為生彼国意故。(『同』三一一)

と「阿弥陀如来を礼拝したまいき」でも意味が通じるのに、「如来」・「応」・「正遍知」と三号を述べている。また、親鸞の加点では「彼の国に生ぜん意を為せんが故なり」と、この箇所では礼拝することが、そのまま願生心を起こさせる働きをもつことを示している点が注目される。『入出二門偈頌』では、

云何礼拝身業礼 阿弥陀仏正遍知 善巧方便諸群生 為生安樂国意故 即是名人第一門 亦是名為入近門

(『定親全』二一・漢文篇一一五)

となっており、願生の意を為すゆえに礼拝するのは人間に根拠を持つものでなく、阿弥陀如来の善巧方便に基づくのだとされる。こちらでは、五念門と五功德門を合わせてあるが、仏の三号が出された意を推しはかることができる。『論註』の釈では、

諸仏如来徳有無量、徳無量故徳号亦無量。(中略)「如来」者、如法相解、如法相説、如諸仏安穩道來、此仏亦

如是、來更不去後有中、故名如来。「応」者応供也。仏結使除尽得一切智慧、応受一切天地衆生供養、故曰応也。

「正遍知」者、知一切諸法実不壞相、不増不減。云何不壞、心行処滅言語道過、諸法如涅槃相不動。故名正

遍知。無碍光義如前偈中解。(『同』)

とあり、「如来」は諸仏の安穩道、すなわち涅槃界から來るとあるから第四淨入願心章にある、

由法性法身生方便法身。(『同』三三六)

ということを示すのであろう。そのゆえに我々をして供養せしめる徳を持つから「応供」でありそれがそのまま、

由方便法身出法性法身。(『同』)

という「正遍知」であるということを示すのである。また、如来の名を問題にしているところに、礼拝門も念仏であるとする曇鸞の見解が窺える。

続いて入第二門だが、『論』の文では、

以讚嘆阿弥陀仏隨順名義称如来名依如来光明智相修行故得入大会衆数。(『同』三四四)
とあり、続く註釈では

依如来名義讚嘆、是第二功德相。(『同』)

と、如来の名義に依つて讚嘆できることが功德であるとする。因の讚歎門では、

云何讚嘆、口業讚嘆。

「讚」者讚揚也。「嘆」者歌嘆也。讚嘆非口不宣、故曰「口業」也。

称彼如来名、如彼如来光明智相、如彼名義、欲如实修行相応故。

「称彼如来名」者、謂称無导光如来名也。「如彼如来光明智相」者、仏光明是智慧相也。此光明照十方世界無有障导、能除十方衆生無明黒闇、非如日・月・珠光但破室穴中闇也。「如彼名義欲如实修行相応」者、彼無导光如来名号、能破衆生一切無明、能滿衆生一切志願。(『同』三二三)

とあり、如来の名義の如く如实修行に相応しようと思えたことそれ自身が功德であろう。『論註』の方では、この後で如实修行に相応できない機の問題について論じられるが今回は触れない。

入第三門は、

以一心専念作願生彼国修奢摩他寂靜三昧行故得入蓮華藏世界(『同』)

と『論』の文があり、それに対して曇鸞は、

為修寂靜止故、一心願生彼国、是第三功德相。(『同』)

と寂靜止を修するためのゆえに、一心願生すること自体が衆生に回施された功德であるとする。それで因の作願門を見ると、まず『論』の文に、

云何作願、心常作願、一心專念畢竟往生安樂国土、欲如実修行奢摩他故。(『同』三一五)

とある。親鸞の加点では「心に常に作願したまえりき」とあって、如来の作願を表す。⁽¹⁰⁾これはけつして行者自身の作願を否定したのではない。さきに引文した覈求其本釈にあつたように、当面は行者あるいは菩薩の作願であつても、その実は如来の作願が本になつて行者の作願が成り立つことを示すものである。『論註』では作願門に、奢摩他云止者、合有三義。一者一心專念阿弥陀如来願生彼土、此如来名号及彼国土名号、能止一切惡。二者彼安樂土過三界道、若人亦生彼国自然止身口意惡。三者阿弥陀如来正覺住持力、自然止求声聞・辟支仏心。此三種止、從如来如実功德生、是故言「欲如実修行奢摩他故」。(『同』)

と三義を開いた。一つ目は此土の行であるが、名号が「止」を成就するという点で、先の讚歎門釈を承けるものである。一切惡は一切無明を指すと考えてよいだろう。『論』では奢摩他は彼土の行であるが、曇鸞は此土にまで広げて解釈した。さきに述べたように、一心願生すること自体が功德である。行者がことさらに奢摩他を修行しようとするのでなく、名号により三界に執着する心が止み、願生浄土の一心が生じてくること自体が、衆生に対して働く如実修行奢摩他の成就であろう。だから、第一義は入第三門から開いてきたものである。

後二つは浄土の行だが、第二義は名号の功德により根本無明が破られることよつて往生すると、自ずと身口意業のすべての煩惱が転ぜられると言うことだろう。第三義は阿弥陀如来の仏力が行者を支え保ち自ずと二乗地を求め心が止むとある。さきに引文した題号釈で、三種莊嚴が常にこの世界において行ぜられ衆生のために大饒益を為すとあつたから、彼土の行である後二義は此土の行である第一義の根柢と言える。この三義の次第により、称名念仏による願生道が大乗の仏道であることが示される。そして、それは「此の三種の止は如来如実の功德より生ず」とあるように、如来の真实功德の力用に根柢をもつものである。

入第四門は、

以專念觀察彼妙莊嚴修毘婆舍那故、得到彼處受用種種法味樂（『同』三四五）
と『論』の文にあり、それを曇鸞は、

「種種法味樂」者、毘婆舍那中有觀仏国土清淨味・撰受衆生大乘味・畢竟住持不虛作味・類事起行願取仏土味。有如是等無量莊嚴仏道味故言種種。是第四門功德相。（『同』）

と、「種種法味樂」を総相である清淨功德をもつて淨土全体の功德を示し、続いて大義門功德で国土莊嚴、不虛作住持功德で仏功德、類事起行願取仏土味で菩薩莊嚴を代表させた。これは淨土で受用する功德だが、これを衆生の上に回施するのである。だから、

云何觀察、智慧觀察、正念觀彼欲如實修行毘婆舍那故。（『同』三一六）
という觀察門は、

一者在此作想觀彼三種莊嚴功德、此功德如實故、修行者亦得如實功德。如實功德者決定得生彼土。二者亦得生彼淨土、即見阿彌陀仏。未証淨心菩薩、畢竟得証平等法身。与淨心菩薩与上地菩薩、畢竟同得寂滅平等、是故言「欲如實修行毘婆舍那故」。（『同』）

と、第一義の此土にまで広げられる。ここでも曇鸞の加点は「智慧をして觀察したまえへりき」と如来の觀察になる。⁽¹¹⁾ 一般に止観行は智慧の完成のために行うとされるが、ここでは智慧をして觀察するのであるから凡夫の行とは言えない。だから智慧というところに、如来回向ということを見出したのであろう。如實功德である莊嚴を觀察するとあるが、どうして觀察できるのかと言えば、その力が如實功德にあるからと言わざるを得ない。その功德が衆生に回施されるのであるから、一切衆生が觀察できるのである。「此に在りて想を作す」ということは、「上卷」觀察門釈にあった、「有る国土を見そなわずに」という法蔵の觀察の功德であらう。さきに引いた出第五門の文に「大慈悲を以て一切苦惱の衆生を觀察す」とあったのはこのことを表すのだらう。

第二義は浄土の行で不虛作住持功德に基づくが、作願門でも述べたように此土である第一義の根拠となる。『論』の主旨は「観・見・願生」であるから、仏を見るというこの功德が三種莊嚴の要となる。偈頌の方では「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」とあり、見仏とは本願力と出遇うことと解される。そして速やかに功德の大宝海を満足せしむとあり、真実功德が衆生の上に成就することが表される。このことを具体的に、作心を離れられない七地以下の未証浄心の菩薩が、凡夫の身のままでありながら浄心・上地の菩薩と同じ功德を得た者としての生を賜ることとして語られる。

ところで上三門と異なり、觀察門積では直接名号に関する文言が見られないので、これは称名ではなく観想念仏ではないかという誤解を生みそうだが、例えば「上巻」不虛作住持功德積では、

又人聞仏名号発無上道心遇悪因縁退入声聞・辟支仏地者。有如是等空過者退没者。是故願言。使我成仏時、値遇我者、皆速疾満足無上大宝。（『同』三〇四）

と、曇鸞は聞名を仏との値遇と捉えている。

また、紙数の関係上具に述べることはできないが、第三觀察体相章の国土莊嚴積（下巻）では、光明功德積で衆生の無明を破る阿弥陀如来の智慧が示され、続く妙声功德積では智慧が具体的に名号となって働いて衆生を正定聚に入らしめることが述べられる。さらに主功德ではひとたび浄土に生ずると菩提心が生じ、仏力の住持により再び三界に戻ってもそれが朽ちないことが示され、続く眷属功德積では「同一念仏無別道故」というところで、一如平等の世界が開かれることが表される。そして受用功德では「乗仏願為我命」と衆生が仏の本願を命として生きる存在になることが示される。このように、名号によって仏道が成就することが、次第として表されている。

また仏莊嚴は、座功德積で真如法性を表し（「上巻」による）、そこから方便法身が生じることを、仏の身口意の三業の功德を出して示す。「下巻」では、身業を「阿弥陀如来相好光明身」と光明で示し、口業を「阿弥陀如来至

徳名号説法音声」と名号で、意業を「阿弥陀如来平等意業」と平等の意業（これは「上巻」性功德積から本願であることが窺える）と示し、いずれも「莊嚴身口意三業用治衆生虚誑三業也」と衆生の三業を転じていくことが述べられる。そして、智業である観察門の中心である不虛作住持功德積に至り、さらにそこから方便智業である菩薩莊嚴が開かれることで出の門が示される。こうしてみると、観察門とは聞名により衆生の宿業が転ぜられていく相が示された文字通り観行体相章であり、五念門の次第を具体的に表現したものであることを窺うことができるのである。出第五門及び回向門については他日を期したい。おそらく、これも果の出第五門によって、往相還相の二つに開かれたのであろう。

三

当節では、各門の關係に触れておきたい。五念門は一つの門が成立したら他四門も成立する構造になっている。曇鸞より後代であり、また五念門を扱ったものではないが、善導の六字積を参考にするとこのことが明確になる。

言南無者即是歸命、亦是發願回向之義。言阿弥陀仏者、即是其行。以斯義故必得往生。」（『同』四五七）とあり、「南無」という礼拝のところに、「一心歸命」という意味と、發願回向という意味があるとす。發願は作願願生であり、それが回向される。五念門の回向門に「云何回向不捨一切苦惱衆生心常作願回向為首得成就大悲心故」とある通りである。

それで、作願・回向が最初かと思えば、「阿弥陀仏」は一心歸命・發願回向の行であるから、阿弥陀仏から南無が開けてきて、そこに阿弥陀仏が収まるという關係になる。なぜならば歸命するに先だつて阿弥陀仏が無いと、礼拝しようにも礼拝できない。だから讚歎門が先であっても問題ない。また『論註』では上巻の作願門積では、

「願生安樂国」者、此一句是作願門、天親菩薩歸命之意也。〔同〕二八三〕とあつて作願は歸命の意を顯わすのだとする。

また、觀察門に五念門の次第がすべて収まることはさきに述べたし、入第一義諦釈では、

復次此十七句非但釈疑、觀此十七種莊嚴成就、能生真實淨信、必定得生彼安樂仏土。〔同〕三二八〕とあるから、觀察から始まっても構わない。いずれにしろ經の体が名号である以上、經に相應する『論』の五念門の体も当然弥陀の名号である。だから、五念門は組織してみると聞名の一念が起る必然性を示すものであり、客觀的に見るのであれば、どこから始まっても成立する性格であると言える。

けれど当事者として主体的に見るのならば、次第としてはやはり礼拝から始まるとすべきだろう。善男子・善女人の立場からすると如来の智慧の光明と出遇い、虚偽に他ならない己の身の事実を知らされることで無明が破られる。この一点を抜きにしては仏道は始まらない。やはり、仏に歸命することから歩みが始まるとすべきであろう。

そしてそれはけつして嫌々ながら歸命するといった不満が残るものではなく、むしろ妄想が晴れたという眞の満足というものを讚歎門は示す。作願は願生浄土の仏道の歩みである。歩みがとまることについて曇鸞は、

尽夫生者上失無為能・為之身、下酬三空不空之愆。〔同〕三二七〕と二乘地に沈むと警告する。

觀察門は弥陀の名号により、衆生の身口意の三業が転ぜられる具体相を示す。それは、五念門の歩みそのものの次第であり、一心が觀念ではなく現実の相であることを表すのである。

回向門は、本願力との値遇を通して眞実なるものを知り、それが自ずと伝達されていく力を示すのだろう。

この行の次第は大切である。構造としてはどの門から始めても構わないとしてもそれでは法相が混乱するし、無

因有果・他因有果という誤解を生じる恐れがある。成立は同時であっても、人間の頭に合うように説くことは大切である。

以上見てきたが、五念門は世親に建った「我一心」の根拠となる歴史的な本願の行であり、また現実の生活の上に歩みとなって現実になった宗教心によって開かれる世界を顕わしたものであると考える。

おわりに

かなり散漫になり、それぞれの問題を十分に考察できなかったが、現時点での見解を示しておきたい。

(1) 成上起下偈にある真実功德相が五念門の成立根拠とされるのは、これから修行して証るのではなく、すでに証として成就した如来の行を行ずる、すなわち回向を用いるということを示すものである。五念門は果の五功德門によって成就するという従果向因の関係となり、また今度は因の五念門が果を成就するという因果一如の構造を持つ。これは、五念門がある特定の個人や集団に属するものでなく、常に行ぜられている本願の歴史の行であることに起因する。

(2) 作願・観察が此土・彼土に分けられたことについては、五功德門から照らして彼土から此土における功德を開いてきたと見るべきだろう。浄土の莊嚴は常に衆生のために大饒益をもたらすものであり、穢土の衆生に無関係にあるのではなく、名号を通して普遍的に働きかけるのである。

(3) 五念門を組織としてみると一門が成ずると他四門も成立するという不可分の関係であるが、弥陀の名号が無いと一門たりとも成立しえない。また客観的に見ればどの門から始まっていても良いが、主体的に考えると礼拝・讚歎・作願・観察・回向の次第となる。法を説く側と、聞法する側の立場は厳密に分けなければならぬ。世親と曇

鸞は聞法する仏弟子の立場を貫いたと言える。五念門は「我一心」の背景であり、また願生道が成仏道であることを示したものである。

- 註
- (1) 良忠『無量寿論註記』（『浄土宗全書』一・三〇八頁）
 - (2) 殿内恒「真宗相承に見る五念門の意義」（『真宗研究』四八・三四頁）
 - (3) 香嚴院惠然『浄土論註顕深義記』による。『論』・『論註』では菩薩莊嚴に名はつけられていない。
 - (4) 香嚴院惠然『浄土論註顕深義記』（『真宗大系』七・四四七頁）
深諦院慧雲『往生論註服宗記』（『真宗全書』十・八三～八四頁）
 - (5) 前四念を往相自利、後一念について還相利他とする点に関しては、見解を異にするが今回は触れない。
 - (6) 『真聖全』二七〇、二九八頁、香月院深励『浄土論註講義』二九〇頁、勸学寮編『浄土論註校異』二五頁
佛敎大学総合研究所『無量壽經論校異』一八頁
 - (7) 安田理深『敎行信証証卷聴記』Ⅲ・二七三～二七六頁 参照
 - (8) 『石同』一三〇頁 参照
 - (9) 義山本では「彼の国に生ぜん云う意を為すが故なり」と読む。（『浄土宗全書』一・二三八頁）
 - (10) 義山本では「心に常に作願し」と読む。（『同』二三九頁）
 - (11) 義山本では「智慧をもて觀察す」（『同』）

凡例

漢字については、当用漢字を含めた現行の通行体とした。